慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「物語」という「政治」
Sub Title	"Politics" as "Narratives"
Author	大石, 裕(Oishi, Yutaka)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2013
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.86, No.7 (2013. 7) ,p.39- 65
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	生田正輝先生追悼論文集 論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20130728-0039

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「物語」という「政治」

大石　裕

1. はじめに――言説と文脈――
2. 「物語」と「現実」の構築・構成
3. 「物語」と構築・構成される「歴史」(1)――歴史教科書問題――
4. 「物語」と構築・構成される「歴史」(2)――歴史小説――
5. 「物語」と構築・構成される「歴史」(3)――評論――
6. 結び

1. はじめに――言説と文脈――

「物語」という用語、そして概念が、マス・コミュニケーション論やジャーナリズム論において重要な位置を占めるようになってきた。その主たる要因が（批判的）言説分析に代表される、メディア・テクストに対する強

い関心であることは論を待たない。言説分析の特徴に関しては、私自身かつて以下のように要約し、整理したことがある（大石二〇〇五、一六五）。

①ある社会的出来事や行為、そしてその出来事や行為の当事者（行為者）がテクストによって表象され、同時に定義づけられ、意味づけられる過程に注目し、それを分析対象とする。
②それに関連して、出来事がある特定の歴史的かつ社会的文脈の中で生じることを強く認識し、分析を行う。
③出来事の表象、定義づけ、意味づけという一連の過程で作用する諸規則や慣行も分析対象とし、その作業を通じてテクストや言説が生産、流通、消費される社会の価値（観）の分布を探り当てようとする。
④明らかになった支配的価値観という「構造」と、テクストや言説の「実践」との関連について考察を行う。
⑤出来事の定義づけや意味づけという一連の過程の中で、社会的行為者が行う、意味のシステムへの同一化、それを通じてのアイデンティティや社会関係の形成、確立、再生産の過程を分析する。

この要約に基づきながらも、本稿ではいくつかの見解を新たに取り入れながら、以下、言説と言説分析に関して再論することにしたい。なお、言説の概念については次のように説明されたことがある。

「言説とは，ある特定の社会・文化的文脈の中に埋め込まれ，文化的実践（生活や思考）によって具体化された一群の信念や態度と定義できる。なお文化的実践は，アイデンティティの形成や社会参加を生み出す方向に作用する。」（カッコ内引用者、Casey et al. 2002, 65）

ここで言う「文化的実践」としての生活や思考の中心には、コミュニケーションという社会過程が存在している。従って言説分析は、コミュニケーションという文化的実践の中で生産され、受容されるテクストの分析を中

心に据えるのである。なお、ここで言う「文化」とは、ある社会の支配的価値観に基づく生活様式と思考様式を指すものと捉えられ、そうした生活と思考の産物としての出来事、事物、そして社会の様々な仕組みなどを通じて文化は表象されることになる。そして、文化を共有するか否かという観点から、人々は「我々」と「彼ら」という社会的な境界線を引くことになる。こうして人々の集合体である社会（近代社会では、その中心は国民国家）は、文化によって区分され、分類されることになり、ここから（国民）文化と（国民的）アイデンティティの問題が生じることになる。

また、コミュニケーションという社会過程の核には「言語というメディア」が存在すると見なすことができるが、「言語分析」と「言説分析」の差異については以下のように説明されている。

「言語分析が抽象的なシステムとしての言語に関心を寄せるのに対し、言説分析は人々の言動が言語（言葉）に関して持つ知識に依拠すると考える。そして、知識に依拠することにより何が生じるかという問題に関心を持つ。」（傍点引用者、Johnstone 2002, 3）

ここで考慮すべきは、「知識」というものが、次のように捉えられることである。

「どの社会にあっても理論化作業や〈観念〉にまつわる仕事、あるいは世界観の構築に従事しているのは、人々のうちのごく限られた集団にすぎない。ところが、社会にあってはすべての人がなんらかの形でその〈知識〉には参加している。」（バーガー＝ルックマン 一九六七＝一九七七、二三）

知識の生成には、ここで言う「限られた集団」、すなわち専門家の集団だけではなく、例えばメディア・テクストの「読み手」としてのオーディエンスも様々な形で参加しているというのがここでの見解である。それに加えて、知識が個人そして社会で蓄積された記録あるいは記憶と深く結びついている点はきわめて重要である。また、知識が諸個人の学習や経験によって蓄積されたものであると同時に、社会の構成員の多数派の間で共有されている点も重視すべきである。共有された知識は、主にメディアを通じて日々更新（ないしは再生産）、あるいは修正されている。

こうした知識をもとに生成されているのが、社会の中で構築・構成された「現実」、すなわち「社会的現実」であり、またその蓄積としての集合的記憶と見なすことができる。なお、集合的記憶については、かつて「共同幻想」という用語によって次のように説明されたことがある。

「（共同幻想とは）個体としての人間の心的な世界と心的な世界がつくりだした以外のすべての観念世界を意味し……、人間が個体としてではなく、なんらかの共同性としてこの世界と関係する観念の在り方（を指す）。」（カッコ内引用者、吉本 一九六八、七）

集合的記憶（あるいは共同幻想）が形成される社会という単位の中で、もっとも代表的なものはむろん国家である。そう考えると、国家レベルで形成された集合的記憶は国民的記憶と呼ばれることになり、国民的記憶と国民的アイデンティティは不可分な関係にあることから、それらが国民国家の形成や維持にとってきわめて重要な要因となる。この種の視座がすでに広く知られている「想像の共同体」論（ベネディクト・アンダーソン）と接続するのは明らかであり、ここで言う「想像」は先に見た「幻想」とほぼ同義だと言える。従って、国民国家とい

う範域における「共同幻想」については、それを「国民的幻想」と言い換えることも可能である。

さらには、集合的記憶や国民的記憶をめぐる生成のメカニズムにも見られるように、言説分析では社会の構成員としてのテクストの読者が、「書くことと読むことの相互関係を意識化し、『テクスト』の意味生成にあたかも共同執筆者のように自ら参加する、生産行為を行う主体となる」（石原ほか 一九九一、六）と考えられている点も強調され、再確認されるべきであろう。すなわち、オーディエンスはメディア・テクストを能動的に読み解く存在と見なされるのである。読者、すなわちオーディエンスを能動的な「読み手」として捉える言説分析（あるいはカルチュラル・スタディーズ）が、マス・コミュニケーション論やジャーナリズム論に対して、これまで大きな衝撃を与えてきたのは周知の通りである。

その最も大きな理由は、かつてマス・コミュニケーション論やジャーナリズム論において支配的パラダイムと見なされてきた、送り手から受け手への情報伝達とそれに伴う受け手に対する効果や影響を中心に据える、いわゆる一方向図式が見直しを迫られてきたことに求められるが、それにとどまらないのは明らかである。というのも、言説分析は言説とそれを取り巻く文脈との相互関係という枠組みの中で考察を行うことに、その特質が存在するからである。すなわち、「人々が現実の環境（real environment）の中で意味形成を行う方法について説明しようとするならば、意味形成の実践が展開される文脈を理解する必要がある」（Blommaert 2005,43）というわけである。ここで言う「現実の環境」、あるいはより広義の文脈の捉え方に関しては、以下に示す「言説と文脈」の相互関係に関する基本的な命題が多くの示唆を与えてくれる（Johnstone 2002, 9）。

①社会（世界）は言説を形成し、言説は社会（世界）を形成する。
②言語（言葉）は言説を形成し、言説は言語（言葉）を形成する。

③コミュニケーションの参加者は言説を形成し、言説はコミュニケーションの参加者を形成する。
④過去の言説が言説を形成し、言説は未来の言説の可能性を形成する。
⑤メディアは言説を形成し、言説はメディアを形成する。
⑥コミュニケーションの目的が言説を形成し、言説はコミュニケーションの目的を形成する。

このような言説の把握の仕方は、先に述べた人々の言動が知識に依拠することにより何が生じるかという問題に関心を持つことと結びつく。というのも、「社会についての知識は、ことばの二重の意味において、つまり対象化された社会的現実の理解という意味と、この現実をたえず創造しつづけるという意味において、実現化(realization)なのである」（バーガー＝ルックマン 一九六七＝一九七七、一一四）と捉えられるからである。すなわち、知識というのは社会の理解と社会の創造という時には対立する二つの側面を有しているのである。さらには、「われわれの一般的な考察にとって重要な原則は……知識は社会の産物であると同時に、社会変動の一つの要素でもある」（同 一四八）と把握されうる点も押さえておくべきであろう。なぜなら、先に述べた言説と知識の関連を前提として、ここで掲げた五つの基本的な命題に見られるような言説と文脈との相互関係、さらには相互作用の過程の中に社会変革、あるいは社会変動の可能性を見出しうるからである。

言説と文脈、そして集合的（国民的）記憶と知識に関するこうした視点を踏まえつつ、以下「物語」と政治の関連について論じることにしたい。

2．「物語」と「現実」の構築・構成

言説分析の主要概念の一つが物語(narrative)であることは知られているが、同時に物語という概念がきわめて複雑で多義的であることも周知の通りである。この概念が文学理論に出自を持つのは当然であるが、そこでは例えば次のように説明されている。

「人生が従うのは科学的な因果の論理ではなく、物語の論理なのであって、理解するとは、ひとつのことがどのようにして別のことにつながっていくのか、何がどのように生じたのかを想像することである。」(カラー 一九七七=二〇〇三、一二三)

この説明の中の「物語の論理」、すなわち複数の出来事の間の因果関係はプロット、それに対し「時間的秩序に従って配列された出来事の継起」がストーリーと呼ばれ、両者の関係については「ストーリーはプロットに対して、その筋立て構成を生みだす前提としての、プレ・テクストに過ぎない」という見方が存在している(石原ほか 一九九一、八四—八五)。

前述したように、言説分析がマス・コミュニケーション論やジャーナリズム論で多くの関心を呼ぶようになるに従い、物語という概念がニュース分析においても積極的に参照され、取り入れられるようになってきた。現実に生じた社会的出来事(=事実)がニュースへと変換される過程を研究対象とするのがニュース分析であるが、物語論との関連という視点に立つならば、そこには以下に示すような重要な点がいくつか存在する。

第一は、ニュースとして報じる出来事の選択、選択した出来事の取材、取材によって収集されたニュースの素材の(狭義の)編集、そして整理、という一連のニュースの生産過程(それは、広義の「編集」と呼びうる)に対

して、ジャーナリズム、さらには社会全体で共有されている物語、特にプロットが影響を及ぼす可能性が強いという点である。というのも、ある出来事の編集、そして理解という作業に対しては、それ以前に生じた類似の出来事をめぐる「前例」としてのプロットが大きな影響を及ぼすからである。そして、ニュースの生産過程に注目するならば、ここで言う広義の編集過程において大きな威力を発揮するのが、ジャーナリズムという業界や組織の中で共有されているニュース・バリューだからである。ニュース・バリューというのは、ジャーナリズムが出来事を選択する際の基準であり、また各ニュース項目の重要度を図る基準である。そして、ニュース・バリューは社会の支配的価値観と連動していることが多いと考えられる。ここから、ニュース・バリューと社会の多数派で共有されている物語との間の強い結びつきを見出すことは容易である。

第二は、ニュースが出来事の展開を報じるという、その特徴から生じるものである。この点にこそニュースがストーリー性という物語の論理を備える理由が存在すると言える。出来事が進展することで、複数回にわたって報道されることも多々あるが、その場合には特にこのことがあてはまる。

第三は、ニュース、そしてニュースの解説や論評などに見られる、出来事が生じた理由や要因に関する説明が、プロットというやはりもう一つの重要な物語の論理を備えることである。

ニュース分析と物語論との関連については、以上のようにまとめることができるが、この問題はそれだけにとどまらない。というのも、物語という概念と機能が以下の指摘にあるような特質も有しているからである。

「（小説などの物語によって構成される作品においては）最終レヴェルでの構想が、ひとつひとつの言葉の選択というレヴェルでの最初の構想に方向づけをあたえていたのだし、逆にいえばそのひとつひとつの言葉への構想の有機的な集積によってはじめて、具体的な小説としてさきの最終レヴェルの構想も実現するはずのものなのである。」（カッコ内引用

者：大江一九九三、四五―四六）

この中の「最終レヴェルの構想」という言葉には、二つの意味が含まれると考えられる。第一の意味は、小説という物語がどのような結末を迎えるかということである。この問題をニュースの物語論と関連づけるならば、先に示したニュースのストーリー性、すなわち出来事をその開始・展開・終結という一連の流れによって報道する傾向と結びつく。ニュースのストーリーは、やはり先に見たようにプロットの問題、すなわちニュースが扱う出来事の因果関係、そして解釈や意味づけと深く結びつくことになる。

加えて、前述したようにニュースの生産過程では通常は前例が参照されることから、ジャーナリストは一定の結末を予期、あるいは期待し、その観点から出来事を報道する傾向が高いという点も重要である。換言すると、一定の結果や結末がまず想定され、それに向けて出来事の素材が収集されるという、一種の逆流、あるいは逆転現象が生じているとも言えるのである。この点でもやはり、どの前例が参照されるかという重要な問題が提起されることになる。その際に大きな役割を果たすのが、集合的記憶ないしは国民的記憶、あるいは国民レベルでの共同幻想なのである。これらの記憶は、言うまでもなくジャーナリズムによって担われるニュースの生産過程だけではなく、オーディエンスの側のニュースの受容（消費）過程においても作用し、再生産されている。

実は、この種の問題と深く関わるもう一つの重要な視点が存在する。それが、前述したニュースというメディア・テクスト（あるいはそれ以外のジャンルのメディア・テクスト）を通じた「現実」の社会的構築・構成、すなわち「社会的現実」の構築・構成という視点である。ここで言う「社会的現実」とは、①社会的出来事、②その出来事に関する報道、すなわちニュース、③その出来事に関する社会の構成員が抱くイメージ（あるいは意見）という、三者の相互作用によって構築・構成される「現実」と捉えられている（アドーニ＝メイン一九八四＝二〇

〇二）。言説分析の主要な研究領域の一つである、ニュースの生産過程における出来事に対する意味付与と、ニュースの受容（消費）過程における出来事の意味解釈という過程は、ニュースで報じられる出来事に関する社会的現実の構築・構成過程、そしてその過程における出来事の意味生成や意味付与は不可分と見なしうる。

ここに、ニュースに関わる物語の政治的、あるいは権力的側面を見出すのは容易である。というのも、一定の解釈と意味をもつ「社会的現実」に基づいて、社会の中で問題や争点は提起され、政策過程においてその問題や争点の解決をはかるために政策が立案・審議・決定・遂行・評価されると見なしうるからである。

次に、「最終レヴェルの構想」がもつ第二の意味について検討してみる。それは、小説という物語、あるいは作品を通じて表明される、作家という書き手の価値観に関わるものである。ジャーナリズムの抱く価値観の反映がニュースという作品、すなわちメディア・テクストであるという見方は当然成り立つ。ニュースはジャーナリズムという組織の産物であるので、必ずしもジャーナリスト個人の価値観がそこにそのまま反映されるわけではない。特にマス・メディアによって生産されるニュースの場合、組織レベルでの方針、なかでも社論に左右される可能性のほうがはるかに高い（ただし、そうした方針や社論がつねに明示されているとは限らない）。

それ以上に、ここで強調すべきは、多くのオーディエンスを対象にニュースを提供するマス・メディアの場合、そうした編集方針や社論にしても、あるいは個々のジャーナリストの見解にしても、そこで用いられる個々の言葉が、社会の多数派の価値観、あるいは支配的価値観の影響を強く受けるという点である。これまで批判的コミュニケーション論やジャーナリズム批判の多くが、ニュースなどのメディア・テクストの有する現状維持機能、あるいは支配的価値観の形成・再生産機能という観点から問題視してきたのは、まさにこの点である。ここに言葉を通して構成される物語が有する「政治」の、一つのしかしきわめて重要な側面が見て取れるのは明らかである。

3.「物語」と構築・構成される「歴史」(1)——歴史教科書問題——

テクストを通じて物語が提示される行為は「物語行為」と呼ばれるが、それに関しては次に見るような興味深い指摘がある。

「物語行為は……一種の解釈学的行為であり、過去の出来事を再構成することによって、現在の自己の境位を逆照射する機能をもっている。過去を現在の時点から再構成し、構成された過去によって逆に現在が意味づけられ、現在の自己理解が変容されるという往復運動を起動させることにおいて、物語行為は二重の意味で過去構成的なのである。」(野家二〇〇五、一〇八)

ニュースというメディア・テクストを生産し、また消費する(読む)という行為は、むろんここで言う物語行為の一種と考えられる。ニュースは、過去に生じた出来事を再構成し、「社会的現実」を(再)構築・構成、あるいは修正することで成り立っている(時には、それをもとに予測を行うこともある)。それは同時に、様々な出来事を日々記録することを通じて「歴史」を創り上げる作業だとも言える。この作業はまた、報道される(複数の)出来事を通じて、以下に見るような、社会の集合的記憶や社会に関するイメージを再生産、あるいは変化させる機能も担っている。

「知識の基礎あるいは国民(ネーション)、政治国家(ステート)ないし運動のイデオロギーの一部となったのは、実際

に民衆の記憶に貯えられたものではなく、その役割を担った人々によって選択され、書かれ、描かれ、そして制度化されたもの（である）。」（カッコ内引用者：ホブスボウム 一九八三＝一九九二、二五）

「歴史」に関してはこのように認識することが可能なのであり、ジャーナリストはまさにそうした役割を担った一群の人々なのである。同時に、野家の先の指摘にもあるように、歴史を創造する行為が現在の自己理解の変容（あるいは再生産）と不可分の関係にあることも重要である。ここから「歴史とは現在と過去の対話である」（E．H．カー）という視点が導かれることになる。以下の指摘は、そうした問題関心を要約したものである。

「過去の歴史的事実は想起から独立に『実在』するものではなく、想起を通じて『構成』されるものである……。『構成』は孤立した個人的行為ではなく、言語的コミュニケーションを通じてなされる間主観的行為である。……その意味で、歴史的事実はまぎれもない『間主観的構成』の所産にほかならない。」（野家 二〇〇五、一六四）

例えば戦後日本社会におけるアジア太平洋戦争、そして戦後の「平和国家」という言葉に象徴される、近代史や現代史といった歴史に関する記憶やイメージという問題を想起するならば、「現在と過去の対話」、あるいは「言語的コミュニケーションを通じてなされる間主観的行為」を通じて行われる「歴史の創造」というこの捉え方が、相応の妥当性をもつことが了解されよう。そして、この種の歴史の創造が戦後日本社会における、「歴史認識」に関する論争、それをめぐる政府の声明や公式見解、そして政治家や識者の発言（時には「失言」）やそれに関する評価、さらにはとりわけアジア各国との交流や論争・対立などを通じて行われてきたのは周知の通りである。

その一方、日本社会における歴史的な出来事の想起、そして歴史に関する評価については、それらがメディア

を通じて間断なく行われてきたという見方も当然成り立つ。そうした作業はまた、様々なイベントを通じて定期的に行われてきたとも言える。その典型的な例としては、三月一〇日（東京大空襲）、五月三日（憲法記念日）、六月二三日（沖縄の慰霊の日）、八月六日（広島原爆の日）、八月九日（長崎原爆の日）、八月一五日（終戦・敗戦の日）などがあげられる。そこでは戦争の犠牲者の追悼とともに、平和を希求する日として毎年式典が行われ、その模様はほとんどが実況されると同時に、ニュースでも繰り返し報じられる。例えば、毎年八月一五日に行われる「全国戦没者追悼式」に関しては、「つなぐ、平和の誓い、ひ孫世代も参列、終戦の日・追悼式」（『朝日新聞』二〇一二年八月一五日、夕刊）、「不戦誓う、六七回目の夏、追悼式『妻の参列』二四人、終戦記念日」（『読売新聞』二〇一二年八月一五日、夕刊）という見出しで報じられている。

ただし、ここで強調されるべきは、社会で共有される歴史的知識や歴史認識のみならず、歴史に関する集合的かつ国民的記憶やイメージの形成に関わるのは、当然のことながらマス・メディアによって提供されるニュースや特集記事、解説、論評、識者の見解、さらにはドキュメンタリーだけではないという点である。例えば、歴史に関する基本的知識や専門知識を提供する教科書や学術書、ドキュメンタリーやルポルタージュといったノンフィクションの作品、あるいはフィクションとしての文学作品、ドラマ、映画、さらに近年ではインターネット上の情報や意見なども大きな役割を果たしている。これらの多種多様なメディアを通じて、歴史の物語は語られ、歴史的知識や歴史認識、そして記憶やイメージが形成され、再生産されていると言える。

この問題に関して、以下、典型的な事例として「歴史教科書問題」をめぐる論争を取り上げ、検討してみたい。日本の歴史教科書の歴史観や歴史認識に関しては、以下のように批判的に要約されたことがある（永原 二〇〇一、二一―二九）。それは第一に、自国の歴史、とりわけ政治や経済の在り方、支配層の政策や行動などをできるだけ美化し、誤りのないものとしてえがきだそうとする方向が存在する、第二に、日本の帝国主義や戦争責任を極

力隠蔽しようとする方向が存在する、第三に、民衆の政治的・社会的行動に関する評価や叙述を極力抑制しようとする方向が存在する、第四に、歴史教育の目的を真理の学習や実証的思考の育成におかず、国家＝現支配層がえらんだ特定の価値観をおしつける「教化」「鋳造」におこうとする考え方が存在する、というものである。ここでの批判の中心は、日本の歴史教科書においては、これらの「物語行為」が遂行される中で、歴史についての「標準的」な知識が提供されてきた点に置かれている。

なお、歴史教科書の執筆者でもあった永原は、戦後日本の歴史教科書がこのような傾向を有してきた主要因を、以下に示すような「近代化論的日本史観」に求め、それについても厳しく批判していた。

「国家や支配層のあやまちをおおいかくし、日本をできるだけよい国としてその歴史と現状をえがきだそうとする場合、（教科書）検定の歴史観を直接間接にサポートしたり勇気づけているのは、『高度経済成長』の事実と、それと不可分の関係で提起された『近代化論』的日本史観である。それは、戦後のめざましい経済復興・高度経済成長をふまえて、戦後ばかりでなく明治以来の日本経済も、アジアのなかで唯一成功裏に欧米なみの近代化の成長路線を歩みえた点を強調（している）」（カッコ内引用者：同二〇〇一、六〇）

この見解は、歴史教科書の中では歴史的出来事が「近代化論的日本史観」という物語によって記述され、語られていると主張し、それを批判するものである。この見解がまた、アジア太平洋戦争を引き起こした戦前の日本社会、さらには経済成長を過剰に重視するあまり、戦前の日本社会に対する反省を軽視してきた戦後日本社会に対する強い批判と結びつくのは明らかである。

ところが他方では、歴史教科書がたとえそうした傾向や方向性をもつにしても、そこで採用された物語につい

ては、「新しい教科書をつくる会」などによって「自虐史観」（あるいは「日本断罪史観」）と論難されてきたことも事実である（例えば、藤岡 一九九六）。さらには、インターネットが普及してからは特に若年層からの多くの批判にさらされてきたことも看過できない。それらを併せて考えるならば、「自虐史観」とは異なる観点からの物語によっても、近代日本の歴史は論じられ、語られてきたとも言える。

加えて、より注目すべきは、歴史教科書というテクストが、日本とアジア諸国、特に日中・日韓との間で深刻な問題を引き起こしてきた「歴史認識」問題の象徴として報じられ、多くの論議を呼んできたことである。すなわち、様々なメディアにおいて歴史教科書というテクストをめぐる言説が、多様な観点に立つ諸見解によって構成されてきたのである。例えば二〇〇一年の段階で、前掲の「新しい教科書をつくる会」のメンバーが執筆した中学の歴史教科書を検定不合格とするよう中国と韓国が日本政府に求めてきたことに関して、『朝日新聞』は「検定の行方を注視する、歴史教科書」という社説の中で次のような主張を展開した。

> 「（「新しい教科書をつくる会」の執筆者たちは：引用者）「自虐史観」などと攻撃し、過去の植民地支配や戦争を肯定的にとらえようとする。それは、当時の日本の国民の苦しみや、侵略を受けた人たちを無視した一方的な解釈である。こういう歴史観を教室で教えることが、次代を担う子どもたちのために本当によいことなのだろうか。疑問を禁じえない。」（二〇〇一年三月二日）

他方、『読売新聞』は「歴史教科書、日本は思想の多様性許容の国だ」という社説において、「自虐史観」批判の観点から以下のような主張を行った。

「いわゆる従軍慰安婦問題。これは、そうした特定マスコミが、戦時の勤労動員だった女子挺身隊を、強制的な〝慰安婦狩り〟制度だったと歴史を捏造した結果、一時、日韓関係を極度に悪化させた。歴史を捏造してまで、日本を比類のない悪の権化に貶めようなどというのは、「自虐史観」の極みである。」（二〇〇一年三月二日）

このように、一見「無味乾燥」に見える教科書というメディアによって描かれる歴史（テクスト）にも、歴史観や歴史認識に基づく物語が内在していると見なされ、教科書検定という問題も含め、論議の対象となってきた。また、メディアで繰り広げられてきた論争、すなわち報道・解説・論評（社説）などを通じて、その種の物語は多くの関心を呼び、論争を生み出してきた。ここで見た『朝日新聞』と『読売新聞』という全国紙の見解の違い、そして様々なメディアにおける論争などを通じて、歴史観や歴史認識に基づく物語が戦後日本社会の中で再生産され、あるいは修正され、変化させられてきたのである。このことは、集合的記憶や国民的記憶、そして歴史の物語が必ずしも一様ではなく、また時代状況によって変化し、揺れ動くことを示している。

それは、歴史観や歴史認識が「自虐史観」をめぐるこうした二分法だけによって整理されないことによっても示される。というのも、一時期多くの論議を呼んだ、そうした論議とは異なる（国民的）物語を創るという、以下に見るような主張も存在したからである。

「ある時以来、戦後日本の外向きの正史（先に引用した永原などによって記述された歴史がそれに当たる）は、日本の侵略戦争を公式に認めてきたが、その際、敗戦者のねじれを、戦勝者の前に示すということを行わなかった。……この打ちすてられた侵略者である使者を〝引きとり〟、その死者とともに侵略者の烙印を国際社会の中で受けることが、じつは一個の人格として、国際社会で侵略戦争の担い手たる責任を引きうけることの第一歩（である）。」（カッコ内引用

者、加藤 一九九七、五五）

この主張は、日本社会を「一個の人格」にたとえ、その形成を前提として日本の戦争犠牲者を弔い、同時にアジアに対する侵略者であったことを認め、アジア各国をはじめ諸外国に謝罪するというものである。独自の観点から提示されたこの主張に対しても、その後様々な批判が加えられた。例えば、「自国の死者への閉じられた哀悼共同体、自国の兵士の死者への感謝の共同体としての日本の『国民主体』を作り出し、結局は日本の戦争責任をあいまいにすることにつながる」（高橋 一九九九、一五一）という見解がそれにあたる。また、在日韓国朝鮮人を念頭に置きつつ、「〈自己が先か他者が先か〉と先後関係を議論する中で、自他を綜合した集団の中から漏れ落ちてしまう人びとはいないだろうか。そこには〈自己〉にも〈他者〉にも帰属できない人びとの集団は存在するのではないだろか」（坪井 二〇〇五、四六―四七）という批判も行われた。

このように様々なメディアで語られる歴史認識を通じて、その時々の言論状況の中で歴史の物語は語られてきたのである。ここに歴史に関する物語のすこぶる政治的な側面が存在すると言えよう。

4.「物語」と構築・構成される「歴史」(2)――歴史小説――

歴史に関する国民的な記憶やイメージを構築・構成するのは、歴史的な出来事や人物に関する報道（ニュース）、解説、論評だけではなく、この作業は教科書や学術書、ノンフィクション、そして小説、ドラマ、映画などによっても行われていることはすでに述べた。以下では、その中の歴史小説を中心にこの問題について論じることにする。

その前に一つ確認しておきたいのは、歴史的な出来事や人物に関する「物語化」を通じた記憶やイメージの構築・構成の過程が多くの段階を経て、そして複合的かつ重層的に行われると捉えられる点である。こうした理解の仕方は、前述した言説分析の中で提示された「間テクスト性」という概念に通じている。というのも、間テクスト性とは、「通常、ある読み手があるテクストを解釈する際に、そのテクストと他のテクストを関連づけて行う」（Edger and Sedgwick 2002, 197-198）ことを指すからである。このように把握される間テクスト性という概念は、オーディエンスの「多様な読み」と関連するが、この問題については以下のように説明されている。

「間テクスト性とは、テクストとは継起的な解釈、再解釈なしには存在できないという命題として解釈されうる。この命題に拠るならば、あるテクストに関して決まりきった読みというのが存在することなど決してない。というのも、テクストを読むという行為それぞれが新たなテクストを生み出し、新たなテクストそれ自体、もとのテクストを解釈するためのフレームの一部となるからである。」（*ibid*, 198）

間テクスト性に関するこの説明を参考にしながら、以下、歴史的な出来事や人物に関する物語化の過程について考察を加えてみる。ただし、ここでの考察は、テクストの「読み手」を中心にすえることで、「書き手」とテクストを切り離すという、間テクスト性も含めた通常の「テクスト論」とは異なり、（歴史的）出来事の構成要素や人物に関する情報を、ジャーナリストをも含むテクストの生産者が、どのように編集し、作品化するかという観点から論じるものである。

第一に、歴史的な出来事の当事者や観察者の手による日記、回顧録、そして証言、あるいは公的な記録など「一次資料」が存在する。なお、既存の史料（資料）は、新たに発掘され、収集された史料（資料）、そして新た

な証言などによって修正や変更が加えられることがある。それ以外に、ジャーナリストによる出来事に関する記事や写真、そして映像なども存在し、それらが史料（資料）と見なされ、活用されることもある。こうした史料（資料）については、確かに出来事を様々な表現形態で再現したものと見ることができるが、前述したように出来事をある一定の観点から「編集」した結果と評することもできる。

第二に、そうした史料（資料）に基づいて執筆される、専門書や教科書、そしてそれらとは表現形態が大きく異なるルポルタージュやドキュメンタリー番組が執筆されたり、制作されたりすることがある。その際、執筆者や制作者は通常、新たな史料（資料）の発掘や証言の収集を行うことになる。これらの作品（テクスト）は、できるだけ歴史的な出来事を忠実に再現しようとする志向性を強く持っている。とはいえ、ここでもやはり、上述した様々な史料（資料）の「編集」作業がある一定の価値観に基づいて行われているのである。

第三に、史料（資料）をある程度は参照しながらも、作者が自らの想像力を働かせながら記述される、フィクションとしての歴史小説が存在する。多くの場合、そうした歴史小説をもとに、映画、テレビドラマ（時にはラジオドラマ）、演劇そして劇画などが制作されたり、上演されたりしている。なお、同一の出来事をテーマとして繰り返し作品（テクスト）が制作されるという例も数多く見られる。加えて、一般のオーディエンスによって共有される記憶やイメージにとっては、歴史小説、ドラマ、映画といったポピュラー文化に属する作品（テクスト）が大きな意味をもつ傾向が強いと見られるという点も重要である。

このように、いくつかの段階を経て、歴史的な出来事や人物に関する集合的かつ国民的な記憶やイメージは構築・構成、あるいは修正され、変化していると考えられる。ただし、こうした段階は当然のことながら直線的に進むわけではない。例えば、先に述べたポピュラー文化に属する一連の作品が社会で多くの関心を集め、それがジャーナリストや専門家に影響を及ぼし、一次資料の発掘が進んだり、専門書が数多く出版されたりするという

例も見受けられる。この点を考慮するならば、歴史的な出来事に関する記憶やイメージの構築・構成過程が、前述したように複合的かつ重層的であることが了解されよう。

これまでの考察を踏まえ、以下では「国民的作家」と言われる司馬遼太郎（一九二三―一九九六年）の代表作である『坂の上の雲』（一九六八―一九七二年、『産経新聞』で連載）を取り上げ、「物語」と構築・構成される「歴史」という問題について検討してみたい。というのも、日露戦争を主に扱ったこの歴史小説は、後に見るように実に多くの作家、評論家、研究者によって論じられ、またＮＨＫによってドラマ化され、それらを通じても戦後日本社会の歴史観や歴史認識に多大な影響を及ぼしてきたからである。

他にも、例えば、大阪府東大阪市の「司馬遼太郎記念館」（一九九六年開館）、愛媛県松山市の「坂の上の雲ミュージアム」（二〇〇七年開館）といった施設（場所）、そしてそれらの「場所」で催される様々なイベント、それらのイベントに関する報道なども、「歴史」の構築・構成に影響を及ぼしてきた。さらには、後述するように、司馬の歴史観（司馬史観）が先に見た歴史教科書をめぐる論議の中でも言及され、参照されてきたことから了解されるように、日本社会の国民的な記憶や歴史観・歴史認識にも、この小説は大きな影響を与えてきたのである。

司馬はこの小説を「まことに小さな国が、開花期を迎えようとしている」という、かの有名な一文から書き始め、そして「この物語の主人公は、あるいはこの小さな日本ということになるかもしれないがともかくわれわれは三人の人物のあとをおわねばならない」と記した（司馬一九九九、七―八）。三人の人物とは、言うまでもなく正岡子規、秋山好古、秋山正之である。多くの史料（資料）と司馬の創作（想像）が織り交ぜられながら、彼らの生涯と活躍ぶりを中心に、日露戦争に関する司馬の物語は展開されていくことになる。

なお、この物語は二〇〇九―二〇一一年の年末にＮＨＫ「スペシャルドラマ」として放送され、多くの反響を

呼んだ。そして、このドラマも司馬の言葉を借りながら、以下のような語りで開始されたのである。

「まことに小さな国が、開化期を迎えようとしている。小さなといえば、明治初年の日本ほど小さな国はなかったであろう。……この物語は、その小さな国が、ヨーロッパにおけるもっとも古い大国のひとつ、ロシアと対決し、どのように振舞ったかという物語である。……かれらは（秋山正之、秋山好古、正岡子規）、明治という時代人の体質で、前をのみみつめながらあるく。のぼってゆく坂の上の青い天にもし一朶の白い雲がかがやいているとすれば、それのみをみつめて坂をのぼってゆくであろう。」（カッコ内引用者、ＮＨＫホームページ）

『坂の上の雲』はまた、多くの資料収集と綿密な取材という点からも、歴史小説として高い評価を得ることになった。実際、司馬は「（日露戦争の）資料が非常に少なくて、また単一で閉口したんですよ。……（コントロールされた資料としての）公刊戦史というのは、日時と部隊を追うのみで、一つ一つの事態についての作戦上の価値観が書かれてないんですよ」（カッコ内引用者、司馬 二〇〇九、一四）と述べている。あるいは「日本海海戦を書きましてちょっと苦しみましたのは、日々変化する細部のことでした。……それが一つ間違うと何の意味もありませんし、しかしそれを間違いないように書いたところでそれは文学的価値とは関係ないのです」（司馬 一九九四ｂ、六七―六八）とも述べている。

このように事実を重視した司馬の歴史物語にしても、『坂の上の雲』が歴史「小説」である以上、その物語を進めるうえで仮構が必要であったことは言うまでもない。この点に関しては、歴史小説家としての司馬に対してきわめて好意的な以下の指摘が参考になる。

「細部にこだわりつつも、その細部において事実がどうなっているのか、結局わからない。そこで司馬は、間違った事実を書いてはならないという『自分に対する規律』を破ったかもしれないとおもいつつ……じぶんで事実を確定したのである。これは司馬がウソを書いたということではない。そのように事実を確定したほうが歴史の真実に近づけるだろう、という判断による仮構といってよい。」（松本 二〇一〇、一〇五）

こうした司馬の仮構、あるいは想像力によって日露戦争は物語として描かれた。それは、次の指摘にもあるように、日露戦争に関する日本社会の国民的な記憶、歴史観や歴史認識、さらには当時の日本社会に対して少なからず影響を及ぼしたのである。

「日露戦争は侵略主義的なロシア帝国主義に、日本国家・日本人が総力をあげて立ち向かった『祖国防衛戦争』であると描ききったとき、いまだ敗戦意識、虚脱感から抜け切れなかった日本人に勇気と希望を与えた。」（中村 二〇〇九、一〇；中村一九九七、参照）

『坂の上の雲』という物語を通じて表明された司馬史観が、日本社会に多大な影響を及ぼし、浸透し、テレビドラマはその影響力を一段と強めたと言えよう。そして、これらの作品が様々な政治的文脈の中で論じられてきたのは確かである。それを司馬作品の「政治化」と見なすことも十分可能であろう。以下、この問題を中心に論じることにしたい。

5．「物語」と構築・構成される「歴史」(3)——評論——

近代日本に関する司馬史観に関しては、『坂の上の雲』をはじめとして司馬が公刊した数多くの小説や評論、そして発言などをめぐって様々な論議が繰り広げられてきた。換言すると、司馬史観は戦後日本社会においては一つの有力な歴史観や歴史認識と位置づけられ、評価されるようになった。言うなれば司馬史観は、多種多様なメディアにおいて展開されたおびただしい数の評論の中で「大きな物語」へと昇華されてきたのである。そうした論議には、司馬の文体や人間的魅力（人間性）に関する評論までもが含まれ、それがまた司馬史観と連動しつつ、司馬作品の物語を補強してきたと言えよう。

司馬史観に関しては、その評価や賛否は様々である。例えば、前述した「新しい教科書をつくる会」の中心的論者の一人は、司馬史観の特徴として、①健康なナショナリズム、②リアリズム、③イデオロギーからの自由、④官僚主義への批判を掲げ、『坂の上の雲』をはじめとする司馬の作品を高く評価した（藤岡 一九九六）。他方で、それとは異なる評価、すなわち司馬史観に対する以下のような批判的評価もある。先に示した日本の「祖国防衛戦争」という司馬の日露戦争観については、「明治時代の政治、軍事、教育、エートス（精神的雰囲気）、そしてナショナリズムも、この外圧（外国から侵略されるかもしれないという恐怖）に由来する」（中村二〇〇九、五）という判断、すなわち「主観的外圧論」がその基盤にあるという見解が提示されたこともある。この批判が重要なのは、日露戦争が日本とロシアという帝国主義国家間の戦争であった、という見解をもとにしながら司馬史観に疑問を投げかけた点に求められる。

また、近代日本社会に関する司馬史観のもう一つの重要な論点をあげるならば、それは「明るい明治、暗い昭和」という時代診断に関する評価である。これに関して司馬は次のように述べている。

「明治は、リアリズムの時代でした。それも透きとおった、格調の高い精神でささえられたリアリズムでした。……昭和には――昭和二十年までですが――リアリズムがなかったのです。……どうみても明治とは、別国の観があり、別の民族だったのではないかと思えるほどです。」（司馬 一九九四 b、八―九）

こうした司馬の近代日本史観はそれ以外の作品、例えば『この国のかたち』という評論集の中でも繰り返し表明されている。ここで留意すべきは、「明治対昭和」という二項対立図式を採用する司馬の見解に関しても、次のような批判が加えられたことである。

「司馬は昭和に入って統帥部が肥大化し、日本の国家は変質した、別の国家になってしまったと言うが、実は統帥権をささえるイデオロギーと制度は、明治期にできていたのである。……このことを見ない司馬史観は、昭和になって突如暗転が起こったように読めるが、『明るい明治』の時代に昭和の破綻の芽は準備されていた。」（中村二〇〇九、一五；中村一九九七、参照）

司馬は、先に示したように「リアリズム」という言葉を用いながら「明るい明治」を描いていた。そして、この見解と自らの半生を重ねつつ「ありもしない絶対を、論理と修辞をもって、糸巻きのようにグルグル巻きにしたものがイデオロギー、つまり〝正義の体系〟というものです」（司馬 一九九四 a、八―九）と断じていた。すなわち司馬は、独自の視点からイデオロギーを把握、あるいは定義し、それに対して厳しく批判し、自らの作品がイデオロギーからは「自由」であると主張したのである。司馬は、イデオロギーという「大きな物語」に制約されながら歴史を描くことを拒絶しようとしていたと言える。

司馬のこうした姿勢に関しては、「司馬遼太郎はその晩年において、ものごとをありのままに見ようとするリアリスト、それゆえに合理主義的な精神という評価が固まった」（松本二〇一〇、五二）という見解が示されたことがある。司馬の志向性が「リアリズム」にあったという評価は、一方においてはこのように確かに存在してきた。しかし、すでに見てきたように、いかに司馬が「リアリズム」に立脚していたと主張し、それが好意的に評価されてきたとしても、『坂の上の雲』に代表される司馬の作品というテクストは（それにはテレビドラマも含まれる）、評論の中で、そして各々の社会的かつ歴史的な「文脈」の中で、様々な角度から論じられ、さらには近代日本をめぐる歴史認識や歴史教科書問題との関連の中で評価されることになったのである。

それは、司馬史観と司馬の作品で表明された、司馬が様々な作品を通して語った物語が、歴史観や歴史認識という「大きな物語」と接続したことを示している。それを別言すれば、皮肉なことだが司馬作品のイデオロギー化、あるいは政治化と言えるかもしれない。むろん、これが司馬作品に限られたことではないのは当然である。メディア・テクストという形態をとった物語は、つねに必然的に政治化する契機を有するのである。

6．結び

外山滋比古はかつて、「虚像」と「実像」という言葉を使いながら次のように述べたことがある。

「表現者は、実体のあるものを比喩にし、虚像にして描く。その表現を理解しようとする受容者は、虚像を実像に還元し、抽象的部分を具体的全体に関係づける。……この虚と実が絶えず関係づけられていると、一方の実を見れば、ただちに虚を思い、虚は知らず知らずに実を誘発することになって、虚実の自由交換が保証される。そうなると、本来は対

照的なものであるはずの実と虚が、いつのまにか等価的なものであるかのように感じられるようになる。」（外山 一九六九、一四三―一四四）

本稿ではこれまで、「物語」と「現実」の構築・構成に関する考察を出発点にしながら、「物語」と「歴史」の構築・構成へと論を進めてきた。外山の表現を借りるならば、史料（資料）に基づく「歴史」という「実像」と、小説やドラマといった「虚像」とが「自由交換」される過程で、様々なメディア、あるいはメディア・テクストが果たす役割に関して考察を加えてきた。そして、事実を志向しながらジャーナリストによって生産されるニュースも、こうした「自由交換」から逃れることは不可能であること、そして一定の歴史観や歴史認識の上に立って描かれる「歴史」も例外ではないことを示してきた。この過程を解く際の鍵となるのが、虚実の「自由交換」を可能にする「物語」なのである。

先に述べたように、メディア・テクストという形態をとった物語は、つねに必然的に政治化する契機を有している。それゆえに「物語」という「政治」という表現、そして理解が成り立つことになる。

参考文献

アドーニ＝メイン、大石裕訳（一九八四＝二〇〇二）「メディアと現実の社会的構成」大石裕訳、谷藤悦史＝大石裕編訳『リーディングス、政治コミュニケーション』一藝社、一四三―一六二。

石原千秋ほか編（一九九一）『読むための理論』世織書房。

大石裕（二〇〇五）『ジャーナリズムとメディア言説』勁草書房。

大江健三郎（一九九三）『小説の方法』岩波文庫。

加藤典洋（一九九七）『敗戦後論』講談社。

カラー、荒木映子ほか訳（一九九七＝二〇〇三）『文学理論』岩波書店。
司馬遼太郎（一九九四ａ）『明治という国家㈠』ＮＨＫ出版。
司馬遼太郎（一九九四ｂ）『明治という国家㈡』ＮＨＫ出版。
司馬遼太郎（一九九九）『坂の上の雲（第一巻）』文春文庫。
司馬遼太郎（二〇〇九）「日露戦争の世界史的意義」文芸春秋編『文芸春秋に見る『坂の上の雲』とその時代』文藝春秋社、一三―三一。
高橋哲哉（一九九九）『戦後責任論』講談社。
坪井秀人（二〇〇五）『戦争の記憶をさかのぼる』ちくま新書。
外山滋比古（一九六九）『近代読者論』みすず書房。
中村正則（一九九七）『近現代史をどう見るか』岩波書店（ブックレット四二七）。
中村正則（二〇〇九）『「坂の上の雲」と司馬史観』岩波書店。
永原慶二（二〇〇一）『歴史教科書をどうつくるか』岩波書店。
野家啓一（二〇〇五）『物語の哲学』岩波文庫。
バーガー＝ルックマン、山口節訳（一九六七＝一九七七）『現実の社会的構成』新曜社。
藤岡信勝（一九九六）『汚辱の近現代史』徳間書店。
ホブズボウム（一九八三＝一九九二）「序論―伝統は創り出される」ホブズボウム＝レンジャー編『創られた伝統』前川啓治ほか訳、紀伊國屋書店、九―二八。
松本健一（二〇一〇）『三島由紀夫と司馬遼太郎』新潮社。
吉本隆明（一九六八）『共同幻想論』河出書房新社。
Blommaert, J. (2005) *Discourse: A Critical Introduction*, Cambridge University Press.
Casey, N. et. al. (2002) *Television Studies: The Key Concepts*, Routledge.
Edger and Sedgwick (2002) *Cultural Theory: The Key Concepts*, Routledge.
Johnstone, B (2002) *Discourse Analysis*, Blackwell Publishers.